

ありませんか。農家の跡取り息子、木材業の長男、役場や団体の職員、「おらがムラをなんとかしよう」、いつのまにか忘れかけていたそれぞれの夢が、再び大きくなったのです。激しい言い合いのなかで、それぞれが持つ夢の幹だけが洗練され、私たちが望むムラの姿が描かれ、模索すべき課題が見えてきたのです。それは農業だけでなく、ムラには商店も観光業も、そして学校も福祉も必要なんだ。そして子供たちが「残りたい」と思うムラが大切なんだと気づいたのです。それは、ひとつのまとまったコミュニティ社会が形成されることだったのです。

18人の仲間と オアシス運動

そして、それらのムラの将来像と方策をまとめ、「オアシス運動」と名付けました。「おいしい、あんぜん、しんせん、すてき」なムラづくり運動です。農業を核とした農村であるとともに、いろんなものが備わったムラであります。それはハード面の整備だけでなく、むしろヒトをそだて育むというソフト面を常に重視することを基本理念に掲げています。

白水村には、環境庁の名水百選に指定された白川水源をはじめ、くまもと名水百選に七カ所、その他大小のたくさん湧水があります。「砂漠のオアシス」、つまり「オアシス運動」は白水村が「心のオアシス」となるような願いも込められているのです。

私の住む両併地区は、白水村の最東部、ここに「オアシス運動」に賛同する十八人の仲間がいたのです。そこで何から始めるかということになったのですが、何といつても食糧の基本であるコメ、しかも「おいしい、あんぜん、しんせん」を掲げていますので、まず無農薬でコメを作ってみようということになりました。

とは言ったものの、「草はどうする、病気がでたら、失敗したらみつともない……」、そんな不安もありました。そこで一五㌔を借地し、共同作業・役割分担方式で取り組むことになりました。そして、この水田を「オアシス農業モデル田」と命名したのです。初年度は反収六俵、動力除草機の導入・堆肥の投入、二年目は七俵、「うん、これならいける」と皆が確信したのです。この活動はさらに発展しました。

平成四年から両併小学校と、熊本市の託麻南小学校が、農業体験交流を始めたのです。先生・保護者・小学生、しかも都市部のマンモス校との交流です。田植え・草取り・稲刈りと、親子交えた作業での流れる汗、この爽快さは何ともいえません。また秋には託麻南小学校の学校祭に参加し、子供は学校見学、父母は「モデル田」で収穫された「おあしす米」の配布、手持ちの農産物の即売会。即売会には託麻南小のお母さん方も売り手に早変わり、温かみのある交流が続いています。

さらに昨年からアイガモ農法も取り入れま

した。PRが功を奏し、九四年には特裁米の子約が八〇トにも達し、「アイガモ田見学ツアー」や、季節の便りの郵送を実施しているところですよ。

新たな事業は 奥阿蘇てんぐ隊

「特定の消費者だけとの交流にとどまらず、不特定多数の消費者と交流できないか」。これが私たちの話し合いで出てきた、次なるテーマでした。そこで新たな事業として始めたのが「奥阿蘇てんぐ隊」の活動です。

これは都市と農村の、より親密な交流のために、消費者に農家民泊を通し農作業を体験してもらうものです。以前から「オアシス農業モデル田」で各種の体験ツアーを実施していましたが、受け入れ側の負担が多く、無駄な労力と時間を要します。「もつと自然な交流はできないものか」と頭をひねりました。「どうせ農業体験なら、どんな作業でもいいはずだ」「仕事を手伝ってもらえばいいじゃないか」「どこの村でも高い費用をかけ、宿泊施設を作ろうとするが、農家の一番いい部屋（座敷はどここの農家でも広くて南向き）が空いているじゃないか」「食事も田舎料理の専門店ではなくてもいいはずだ。農家がふだん食べているのが田舎料理だ」などと考えました。

そこで一泊二食付き、農作業三時間で、体験料が三千円の農家民泊をやってみることにしました。すると初年度にして約五十件の宿